調査レポート

魅力と顔

――男も顔の時代

「年齢別に見た男性の意識と行動調査 '92」より

「男・女の魅力」に顔・かたちが関係すると考える人は、男性の約8割
男女ともルックスが重要視される

女性の「外見上の魅力」ベスト3は顔、表情、プロポーション

1993年6月

ポーラ文化研究所

問合せ先：村澤・高谷

はじめに

「人は見かけによる」というと、おそらく賛否両論が出てくるだろう。賛成の人は体験上、素直にそう感じているのかもしれないし、反対の人は外見だけに左右されてはたまらないということかもしれない。しかし、いずれにせよ、外見、あるいは見かけ、言い替えると形あるものの視覚的な情報は、日常生活のなかで、受け手の意志にかかわらず、見た者の目に飛び込んで何らかの影響を与えているだろう。

最近はテレビのスイッチを入れれば、見かけに対する究極の対応、すなわち美容整形に関して術前術後の本人がＶＴＲを交えて紹介される番組を見ることができる。善し悪しは別として一つの現実がお茶の間まで飛び込んでくるようになった。

また、「男は顔じゃない心だよ」という言い回しがある。いつ頃から使われはじめたか詳細はわからないが、こんな表現がある以上、顔に左右されることがあったのだろう。男性に限らず、女性の見かけについては、１８世紀初めに儒学者・貝原益軒によって書かれた「女子を教ゆる法」のなかに「女は容（かたち）より心」とあるから、ずいぶん昔から「見かけ」については気にはしていたことがわかる。しかし、その後のいわゆる女子教育書には同様の記述が続くことから、逆に「見かけ」が人の心を動かしていたのは避けられない事実のようだ。

そこで、ポーラ文化研究所の実施している「年齢別に見た男性の意識と行動調査 ‘９２」より、「魅力と顔・かたちの関係」についての回答を分析してみた。

レポートの目的

「年齢別に見た男性の意識と行動調査 ‘９２」より、「魅力と顔・かたちの関係」の結果を抽出して、「外見上の魅力」に対する男性の意識を明確にする。

調査レポート「年齢別に見た男性の意識と行動調査 ‘９２」

調　査　地　域　：東京駅３０ｋｍ圏

調査対象者数　　：16から65歳までの男性１０５０人

調査対象者数　　：

高校生	７５人	30－34歳（既婚）	７５人
19－24歳（大学生）	７５	35－39歳（既婚）	７５
19－24歳（社会人）	７５	42－45歳	１００
25－29歳（未婚）	７５	46－49歳	１００
25－29歳（既婚）	７５	50－59歳	１００
30－39歳（未婚）	１５０	60－65歳	７５

調査対象者抽出法：エリアサンプリング法

調　査　方　法　：戸別訪問面接聴取法および留置法の併用

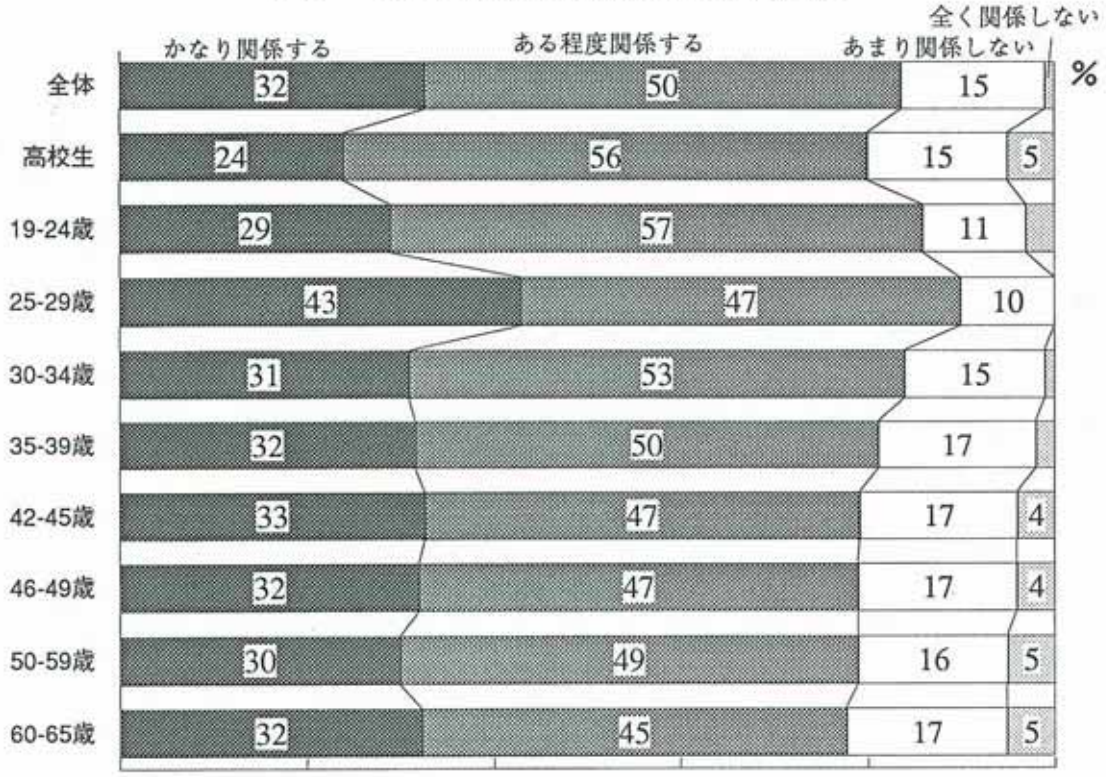
調　査　期　間　：１９９２年６月１９日～７月１０日

Ⅰ．結果

1．「女性の魅力に顔・かたちは関係する」と思う肯定派が８２％。

まず、「女性の魅力に顔・かたちは関係すると思いますか」について。

図１　女性の魅力に顔かたちは関係する



「女性の魅力に顔・かたち」は「かなり関係する」と考える人は、男性全体では32％である（図１）。年齢別に見ると、＜25－29歳＞が突出して高く43％を示している。＜高校生＞が24％で一番低い。30歳以上ではほぼ同じ値を示す。

「ある程度関係する」まで含めた＜肯定派＞を見ると、全体では82％で、５人に４人以上の人が「顔・かたち」と「魅力」の関係を肯定していることになる。逆に20％弱の人、言い換えると５人に１人が「顔・かたち」と「魅力」の関係を否定的に見ていることとなる。

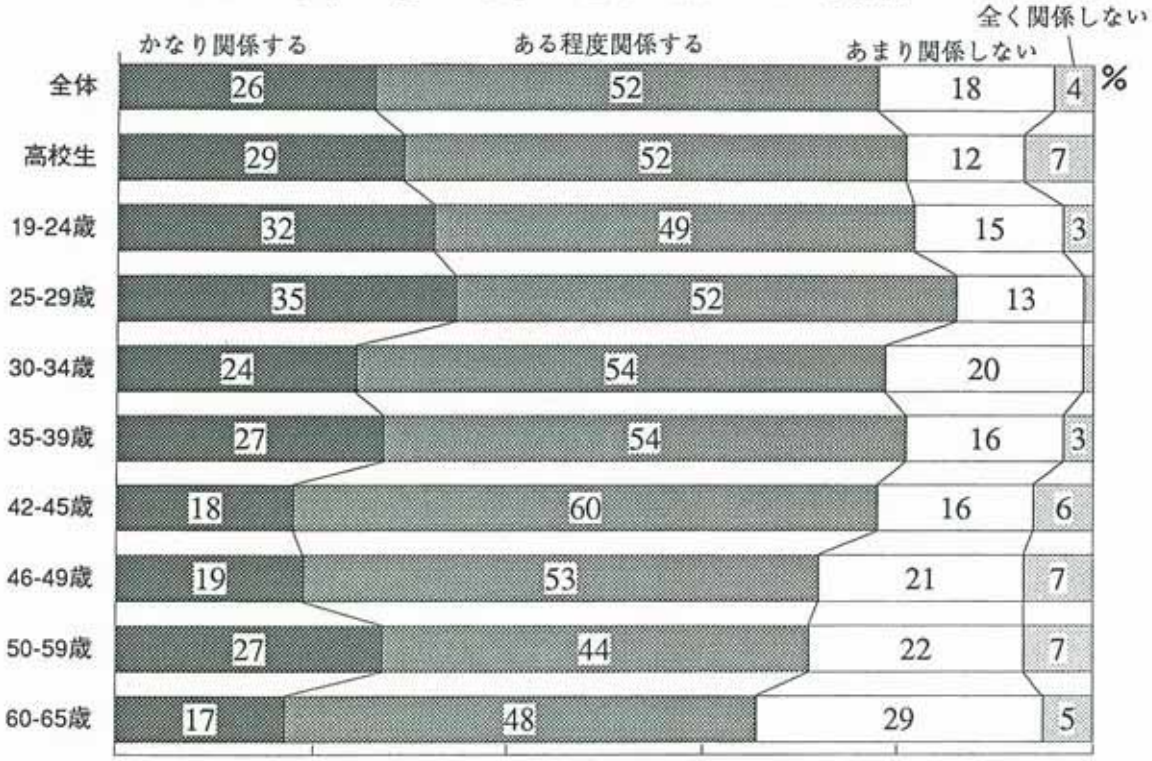
＜肯定派＞についても年齢別に見ると、一番の多いのは＜25－29歳＞の男性で、90％、10人中９人いる。この年齢では＜否定派＞は10人中１人に過ぎないことになる。続いて＜19－24歳＞で86％、＜30－34歳＞で84％、35歳以上では大きな変化はない。残りは平均以下となる。

なお、＜25－29歳＞＜30－39歳＞の未既婚別を見たが、明確な差は見られなかった。

2．「女性が感じる男性の魅力に顔・かたちは関係する」と思う肯定派は７８％

つぎに「男性の魅力」について、「女性が感じる男性の魅力に顔・かたちは関係するかどうか」を聞いている（図２）。

図２　女性が感じる男性の魅力に顔かたちは関係する



「かなり関係する」という＜積極的な肯定派＞は男性全体では26％、「ある程度関係する」をも含めた＜肯定派＞は78％となり、男性自身が「女性の魅力」に回答したのとおおよそ同じ傾向にある。

年齢別に見ると、＜積極的な肯定派＞はここでも＜25－29歳＞の男性が35％でトップで、つぎに＜19－24歳＞で、＜50－59歳＞を除いて団塊の世代以上は20％以下で低い。

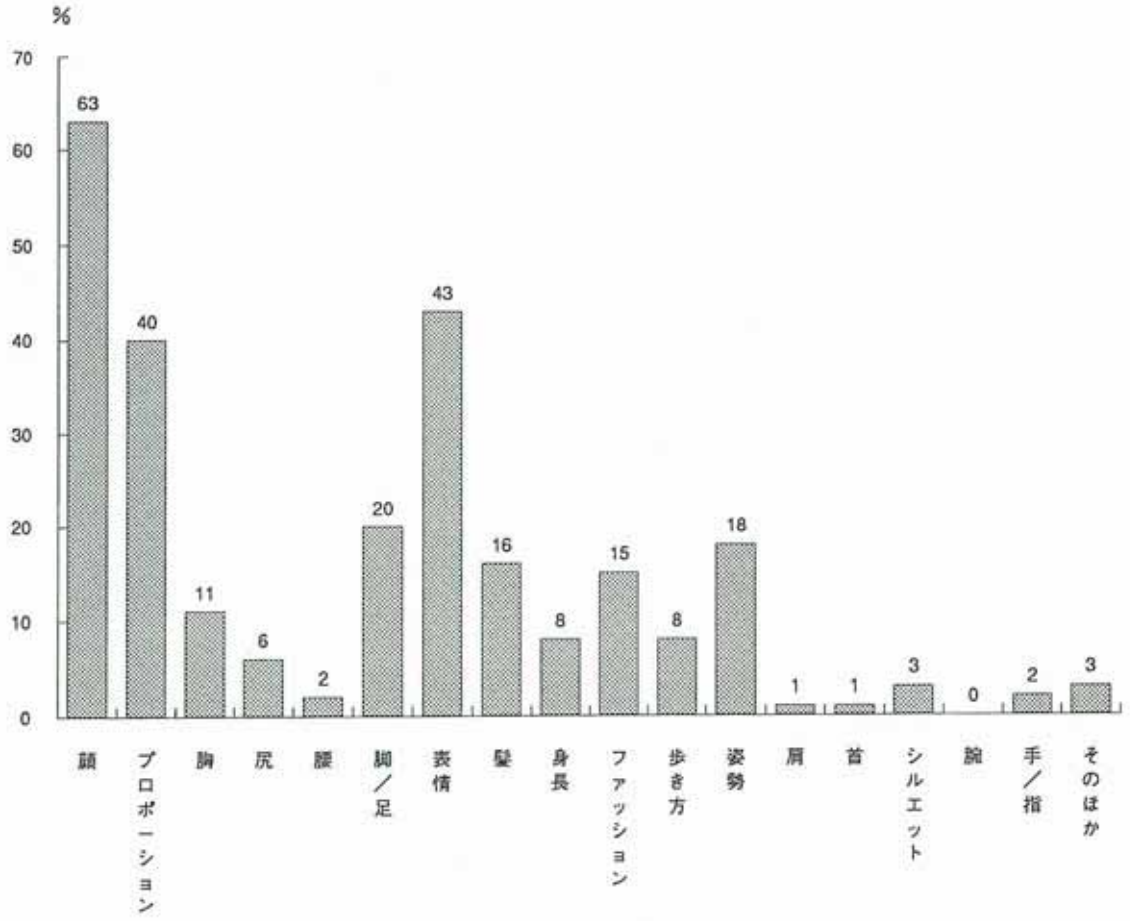
「ある程度」を含めた＜肯定派＞は、＜25－29歳＞の87％をピークに、年齢が高くなるにつれて低くなる。一番低い＜60－65歳＞では65％で、３人に２人となる。

なお、＜25－29歳＞＜30－39歳＞の未既婚別を見たが、明確な差は見られなかった。

3．「女性の外見上の魅力について重視するところ」は「顔」「表情」「プロポーション」

続いて「女性の外見上の魅力について重視するところはどこですか」を聞いている。

図３　女性の外見上の魅力で重視するところ



全体的には、「顔」が63％で第１位、「表情」が43％で２位、「プロポーション」が40％で３位となる。以下は20％より低く、「脚／足」「姿勢」「髪」「ファッション」と続く。

年齢別には明確な傾向を示す項目はなく、「姿勢」が30代以降がそれ以前に較べてやや高い傾向にあるぐらいであった。

そこで、個別に詳細を見ると、いくつかの特徴が見られた。目立ったものをあげると、「顔」については＜19－24歳＞社会人で75％と高く、「プロポーション」は＜19－24歳＞社会人と＜25－29歳＞未婚、＜30－34歳＞既婚に高く、「胸」は＜50－59歳＞＜42－45歳＞で、「脚／足」は＜30－34歳＞で、「表情」では＜35－39歳＞未婚と＜30－34歳＞既婚で、「髪」については＜高校生＞が圧倒的に高く、「身長」は＜35－39歳＞未婚、「ファッション」は＜35－39歳＞が高く、「歩き方」では＜60－65歳＞と＜50－59歳＞で、「姿勢」は＜60－65歳＞と＜35－39歳＞既婚で高い傾向にあった。

II．考察

1．「女性の魅力」と「男性の魅力」とも「顔・かたち」が関係すると考える男性がたいへん多い。

「女性の魅力」と「男性の魅力」とも８割の男性が「顔・かたち」が関係すると答え、年齢別には＜25－29歳＞で高いという結果であった。

この結果だけで普遍化はできないが、女性にかぎらず男性も「顔・かたち」が重要だと自覚しているデータが得られたことになる。「顔・かたち」、言い替えれば「見かけ」「外見」「ルックス」など視覚による情報の重要性が語られているとも言える。

2．男女を比較すると、女性の「顔・かたち」がより重視されている。

全体としては、女性の魅力では82％、男性の魅力では78％と、男女間で大きな違いがないように見えるが、年齢別変化を比較してみると、大きく違う点が出てくる。

女性では年齢が高くなってもほとんど変化がなかったのに対して、男性については年齢が高くなるにしたがって＜肯定派＞が減っていく。特に＜46－49歳＞以上で差が開いていく。＜46－49歳＞で７％の差に対して、＜60－65歳＞では77％と65％で12％の差になる。このことは年齢が高い人ほど、男の方が魅力に「顔・かたち」が関係しないと考える人が増えていることになる。

しかしながら、＜50－59歳＞で＜積極的な肯定派＞が27％とその前後に比べて10％近く多いのは、興味深い結果である。人生５０年を経て、あらためて「自分の顔」を見直した結果であろうか。あるいは顔を通して人生を見つめ直したのであろうか。

また、＜高校生＞＜19－24歳＞では「男性の魅力」の方が「かなり関係する」で３～５％ほど高い傾向にあった。自分たちの「顔・かたち」に強い思いがあるのだろう。

3．魅力アップには豊かな表情を！

外見上の魅力としては「顔」、「表情」、「プロポーション」がベスト３として出てきた。それぞれの質については何も聞いていないので、方向性はわからない。しかし、少ない情報で敢えて判断すれば、このなかで重要と思われるのは、「表情」、魅力を感じる表情である。なぜなら、「顔」や「プロポーション」は基本的には変わらないものであり、容易に取っ替えひっかえすることができないのに対して、表情はトレーニングで変えうる可能性をもっているからである。また、日本人の「表情」は伝統的にはあまり「表情」に出さないのがよしとされてきたので、ほかの国の人と較べると「表情の表現力」がまだまだ乏しいからでもある。

したがって、すてきなスマイルを含めて、豊かな表情を心掛けたり、トレーニングすることで、自分のものにすれば、魅力アップにつながるであろう。

4．「見かけ」も重要の時代に

かつては「見かけ」「外見」「ルックス」というと、まさに「見せかけ」で、「心」あるいは「内面」とは別のものとしてとらえられ、軽視されがちであった。もちろんそれはタテマエであったかもしれない。しかし、現実にタテマエ的な規範がくずれ、感じるままがよいとされてくると、感覚的な要素が重要視されてくるのは当然だろう。その意味で、美容整形した顔が術前とともに紹介される番組がテレビに登場してくるのも、その是非はともかく、理解はできる。

まさに視覚情報重視の時代である。視覚がもつ情報、たとえば第一印象などがそれなりに重要にはなろう。

しかし、今回の調査では「顔・かたち」以外については質問していないので、データからはそれ以上言えないが、このような「見かけ」重視は、従来の「見かけ・無視。内面・重視」の「見かけ・無視」が「重視」に変わっただけでなく、「内面・重視」をも「無視」へ反転させてしまったようにも見える。

内面重視の尺度－－たとえば規範など－－が不明瞭となっている現実もあることはあるのだが、文化の豊かさを考えるとき、「内面」と「見かけ＝外面」のバランスがこれからは求められるのだろうか。